

多様な人間を巻き込む「関わりしろ」の創出

—わらしべはうすを「心地よい」関係性づくりの拠点とするために—

城 智史 Joe Satoshi

研究背景

学部時代はグラフィックデザインを主な媒体として制作していた。グラフィックデザインとはクライアントとターゲットとの意思疎通によるマッチングを促す行為であるが、その先にある出会いや実際に行われる交流、それらが展開される場所へも興味を抱くようになった。「心地よい」関係性を構築する交流の拠点となる空間とは、どのような「場所」なのだろうか？この疑問が、本研究の出発点である。

研究概要

「心地よさ」とは、他者（人に限らない）から与えられた刺激に精神的な緊張や負担を強く感じることなく、心や体にとって予期せぬ作用が起こり、それを滑らかに受け入れられた時に生まれる感情である。そして「心地よい」関係性とは、適度な「摩擦」を介するコミュニケーションにより醸成される、人間同士の繋がりのありかたである。このような繋がりを産む場所をリサーチし、何が「心地よさ」を生み出す空間を構成する要素となっているかの調査を行なった。これにより浮き彫りになった特徴は以下の通りである。

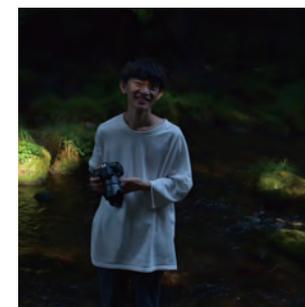
- 多様な人々が介在できるほどの、多くの行動の選択肢が存在している
- 自主的に行動を起こせるほど、空間内での

制限が少なく寛容である

- 多様な人々を受け入れられるほどの精神的な余裕が蔓延している
- 一度の利用における滞在可能時間が長く、穏やかに過ごせる時間が設けられている
- 運営体制の見直しや備品のメンテナンスが十分に行われており、継続性が高い
- 収入と支出の釣り合いが取れており、長期間の存続が保証されている
- 新たな試みを行うために必要となる、空間的な余裕が常に保たれている

これらは、一つの空間において個人が行動を起こす際に必要となる「余白」である。地域の活動を増やす「関係人口」を論じる際、これらの余白を「関わりしろ」と呼ばれている。（『月刊ソトコト』編集長である指出一正氏が使用）

本研究では、「心地よい関係性」が社会的空間のなかに実現されるプロセスのありかたを分析・検証するため、秋田市で10年以上活動を続けるチャリティー形式のリサイクルショップ『わらしべはうす』と協働する実践型のプロジェクトを行なった。普段の営業のサポートと並行して3つの企画を行い、『わらしべはうす』に「関わりしろ」を付与し、自由な活動を起こす拠点とすることが、本研究の狙いである。



1995年京都府生まれ。2018年秋田公立美術大学美術学部コミュニケーションデザイン専攻卒業。人に影響されやすく、好奇心の焦点が定まらない。大学院では、人が自発的に集まり交流をする「心地よい空間」に興味を持ち、フリマ形式のチャリティー団体『わらしべ貯金箱』と協力して「心地よい空間作り」を試みた。



「多様な人間を巻き込む「関わりしろ」の創出」
 2020年
 絵本、立体、アニメーション、映画
 ポスター、映像、布小物紙、布
 H:4000 × W:5000 × D:5000mm